

講演 1

なぜツバメの巣を“養殖”するのか？
——生産から消費の間のコンテクストを読み解く——



佐久間 香子
(東北学院大学・准教授)



写真1 洞窟内の巣で子育てをするアナツバメ

●ツバメの巣（食用）について

本日は「なぜツバメの巣を“養殖”するのか」というタイトルでお話します。まずお伝えしておかないといけないのは、今日お話しする「ツバメ (Swiftlets)」は春に日本に飛来するツバメとは違います。あれは英語で Swallows です。このツバメ (Swallows) の巣は砂や泥、小石できていて全く食べられません。他方、高級食材としてのツバメの巣は東南アジア太平洋、南太平洋地域に分布するアナツバメ (Swiftlets) の巣です (写真1)。アナツバメはこうした地域の中でも、断崖絶壁の海岸だとか洞窟の中だとか石灰岩質のところに営巣します。食べられる巣は何でできているかといいますと、基本的には親鳥の唾液です。その他に親鳥の羽とかのゴミが混ざりこんでいますが、店頭に並ぶ前にそれらは全部取り除かれます。

私がずっと調査しているボルネオ島にもたくさんの種類のアナツバメが生息しております。そのすべてが食べられる巣を営巣するかというそうではなく、Glossy swiftlets (*Collocalia*) と Echolocating swiftlets (*Aerodramus*) だけです。これら、だいたい年に2回から3回営巣します。基本的に、洞窟の中で人間が採集するのはヒナが巣立った空の巣です。人間にとっては年に3回採集できて、アナツバメにとってはヒナが巣立ったら必要ないものなんです。でも、ツバメの巣を採集する作業は命がけです。竹で組んだ足場とか、ロープだとか、地域によっ

てやり方が違いますが、落ちたらほぼ間違いなく死にます。それぐらい危険を伴う作業なので、誰でもできるわけではないし、誰もがやりたいわけではない。お金を積まれても嫌だという人の方が多いと思います。

それでは、なぜ・いつからこんなものを人間は食べているのでしょうか？この辺の話は簡単に済ませますが、ツバメの巣は古くから「東洋のキャビア (caviar of the East)」と称されて、東南アジア海域の交易でも交易品リストに載っています。いくつかの歴史研究を参照するに、ツバメの巣の記述が文字資料として確認できるのはどれだけさかのぼっても明王朝だそうです¹。明王朝といってもものすごく長いんですけども、中国の王朝の歴史については割愛します。ただ、これが食用として知られるようになった逸話として残っているのは、次のようなものです。明王朝期、ある港に 100 歳を超えたご老人がいたそうです。長生きの理由が知りたかった時の皇帝が使いを出しました。そうしたら後日、老人から皇帝宛に届いた長い手紙には、ツバメの巣を食べているから長生きしている旨がしたためられていた。そこから不老長寿の薬としてツバメの巣を食べる歴史が始まったそうです。ただ、その時それを食べることができたのは、皇帝と一部の特権階級の人だけでした。このように、ツバメの巣は富と権力の象徴であり、威信を示すものでした。

そして現在、アジア太平洋域が世界最大のツバメの巣の消費地域です。今世紀以降の中国の経済成長を伴いまして、消費者層消費人口が急速に拡大しています。加えて、ツバメの巣を食べる人たちは中国大陸だけではなくて、華僑華人いわゆるチャイニーズディアスポラと呼ばれる人たちも含まれます。日本に住んでいるとあまり馴染みのない資源ですが、ある報告では、ツバメの巣産業は年間 4 億 5000 万米ドルの利益を生み出しているというデータもあります²。なかなかの規模ですね。

じゃあ、その資源を産出しているのはどこかというと、ほとんどがインドネシアです。国別に示した世界供給量の割合 (2022 年) では、インドネシアが 80% を占めています。そして、1 位から大きく引き離されて 2 位のマレーシアが 13% を占めています³。インドネシアには命

1 Chiang, Bien 2011 Market place, labor input, and relations of production in Sarawak's Edible Birds Nests trade. In *Chinese Circulations: Capital, Commodities, and Networks in Southeast Asia*. E. Tagliacozzo and W. Chang (eds.), pp. 407-431. Duke University Press.

篠田統 1970 「燕窩」『日本歴史』260:78-98。

2 Kuo, Yu-An 2022 Salivating Sales: Ethnic Chinese Malaysians and the Edible Bird's Nest Industry. Taiwan Insight. Taiwan Research Hub; University of Nottingham. <https://taiwaninsight.org/2022/03/10/salivating-sales-ethnic-chinese-malaysians-and-the-edible-birds-nest-industry/>

3 Halkam, Hamka 2024 Analysis of Indonesian Edible Bird's Nest Exports to Hong Kong in 2018-2022. *Journal of Social Political Sciences* 5(2): 161-172. <https://doi.org/10.52166/jsp. v5i2.226>

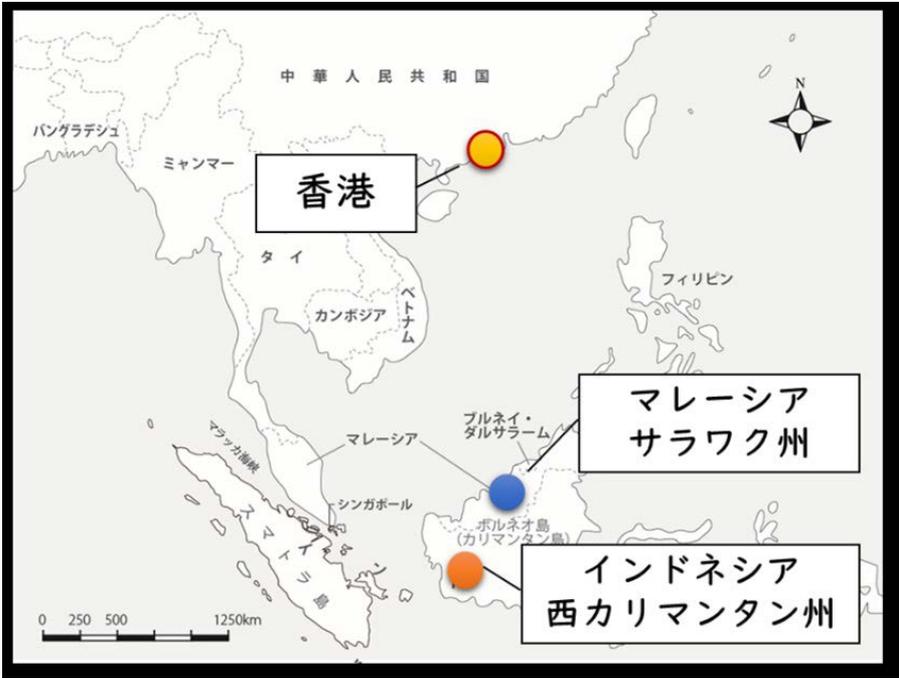


図1 発表に登場する地域

がけで洞窟から採集している人がこんなにたくさんいるのかというそうではなくて、その多くは“養殖”です。“養殖”の知識・技術を世界で初めて確立したのがインドネシアです。

今日は、ボルネオ島にあるサラワク州（マレーシア）と西カリマンタン州（インドネシア）の2つの地域を調査してきた成果に基づいてお話ししたいと思います。これらの地域から採集されたもののほとんどは香港に送られ、そこから世界各地に輸出されます（図1）。

このような資源を題材に今日、私が考えてみたいのがタイトルの通り「なぜツバメの巣を“養殖”するのか」です。アナツバメは今まさに資源枯渇や種の絶滅の差し迫った危機にあるというより、巣の採集が命がけだから安全な方法として“養殖”というのも1つの答えでしょう。あるいは、需要は年々拡大しているんだから“養殖”の方が効率的だという理由もさもありなんです。経営コンサルタントみたいな考え方をするならこれらはもっともな理由です。けれども、先ほどの藤川先生から趣旨説明があったように、もっと微視的にみたい。というのも、私が調査してきた村の人たちは、洞窟で採集していたけれどそれをやめて“養殖”を始めました。ならば、その人たちはどういう理屈で、どういう背景があって、どういう生業をしていた人が何をきっかけで洞窟での採集をやめて“養殖”を始めたのか、あるいはその理由をど

う説明するのか。こうしたことを消費社会の動向から整理してみようと思います。つまり、資源の生産者側の社会における、“養殖”を始めるローカルな理屈を消費動向との関連から説明してみたい。そして、そこからどんな世界が描けそうなのか、どんな視点がありうるだろうか、ということを示唆できればと思います。

● ツバメの巣を採る人びと（マレーシア サラワク州）

まずは、ツバメの巣を採る人びとについてサラワク州（マレーシア）側の事例を使ってご紹介します。

ボルネオ島のツバメの巣が採れるというのは、内陸部の洞窟が中心です⁴。なかでもサラワク州のニア洞窟は、考古学者の間では有名な場所なのですが、ツバメの巣業界でも昔から有名なツバメの巣の採集場としてよく知られています。例えば、イギリス植民地以前のブルック家が支配したサラワク王国時代に発行していた官報『*Sarawak Gazette*』でもニア洞窟におけるツバメの巣オークションの記事が度々登場します。1841年以降、イギリス人資本家ブルック家が統治するサラワク王国時代が約100年間続きました。王国は、太平洋戦争を経て1945年、3代目の王の時代にブルック王国は終焉を迎えます。ブルック家が支配するサラワク王国時代の国家歳入は、そのほとんどを森林資源の交易に依存していました。貿易の品目には、ラタン、はちみつ、天然ゴム、蜜蝋、樟脳、ツバメの巣などなどの林産物がずらりとリストとして並んでいます。こうした森林資源は当時の海洋貿易の主力商品でした。

時代は飛んで、私が長期で住み込んでいた2010年、この頃の調査地の村（M村）ではまだ洞窟でツバメの巣の採集活動をしていました。洞窟での採集はかなり過酷な活動です。不安定な足場で死と隣り合わせの作業が伴いますし、数週間から数ヶ月にわたって洞窟に住み込みますので、もちろんトイレ、お風呂、ベッドありません。そこでキャンプ状態です。私は1週間で音を上げました。でも、採る人たちにしてみれば、一度にまとまった現金が獲得できるまたとない機会です。しかもそれが年に2～3回採集できるんです。ところが、この村で2023年になんと“養殖”を始めたということを知り、見に行ってきました。

それではまず、マレーシア側でどういうところで、誰が、ツバメの巣を“養殖”していて、どんなやり方があるのでしょうか？そして、先ほど洞窟で取っていたM村はどんなことがきっかけで“養殖”を始めたのかを見ていきたいと思います。

4 Koon, L. C. and Earl of Cranbrook 2002 *Swiftlets of Borneo: Builders of Edible Nests*. Natural History Publications.

●ツバメの巣を“養殖”する人びと（マレーシア サラワク州）

サラワク州では、“養殖”の形態を大きく3つに分けることができます。1つ目はサラワク州内のツバメの巣の“養殖”事業に参入者の大部分を占めている形態で、今日の発表で便宜的に「専門業者」と括った人たちです。これは、“養殖”に特化した特殊な施設、これは便宜的に「ツバメマンション」と呼ぶことにしますが、このツバメマンションを沿岸部にたくさん作っています。この場合、ツバメマンションの持ち主のほとんどがマレーシア華人です。これをやるにはまとまった資本が必要です。

2つ目は、村落での空き家とか農作業小屋を利用している形態です。こちらはマルチエスニックに参入が可能です、少し前までは失敗することが多かったのですが、最近その状況が変わってきているようです。いずれの形態にしろ、みんなが口を揃えて話していたのがアナツバメの鳴き声の入手が成功のカギを握るということでした。ツバメの巣は、業界では黒い巣と白い巣に大きく分けることができまして、高額商品になるのは白い巣です。なので“養殖”をする人たちはいずれも白い巣を営巣する種のアナツバメの声が欲しいのです。その音声データが高値でやりとりされるという、まあ不思議な世界です。白い巣を営巣するアナツバメの音声データを絶対に騙されないように入手しようとして、みんなあの手この手のコネを使っていました。興味深いのは、私が最初に聞いた2010年の時点では、これをサラワクの人、あるいはマレーシア人から買うとまず騙されるという評価です。では誰なら信用できるのかというと、話を聞くことができた“養殖”事業者が口を揃えて「インドネシア人だ」と答えるのです。マレーシア、あるいはサラワクの人たちは、傾向としてインドネシア人を見下す発言が多いのですが、ツバメの巣の文脈だけで言うと、これにかけては「インドネシア人から買ったなら間違いない」という説明の仕方をするんですね。

ただ、最近変わってきたというのは、そのノウハウとかその音声データも今や簡単にコピーできるんですね。ですので、それをうまくサラワクなりにアレンジしたサラワク業者が出てきたようなんです。インドネシア側ではもう当たり前のように、どうやったら“養殖”がうまくいくかを書いたマニュアル本（例えば Tribowo 2006⁵）がたくさん売られています。本屋さんにこの手の本が並んでいます。こうしたものがサラワク、あるいはマレーシアにインストールされてきたのです。

そこから話を私がずっと調査してきたM村に戻します。かつて洞窟でツバメの巣を採集していたこの村でついに“養殖”を始めた人がいます。これが住居兼ツバメの巣の“養殖”所です（写真2）。中を見せてもらいました。どうなっているのかというと、機械にUSBメモリ

5 Tribowo, Hadi 2006 *Rahasia Sukses Budi Daya: Burung Walet*. Nuansa Aulia.



写真2 M村で唯一のツバメの巣の“養殖”所

が2つ差してあります。これは外に向けて流す親鳥を呼ぶための声と、ツバメマンション内に流す営巣を促す声です。必ず2つの音が必要です。2つないとうまくいかないんです。これだけで完成ではありません。洞窟の中の環境を再現しないとイケない。アナツバメはとても警戒心が強いので、洞窟の奥の奥、天敵がいらないようなところで営巣します。だけど、“養殖”は人間の住居の近くでやるわけですから、アナツバメ（特に卵やヒナにとって）の天敵であるヘビやネズミ、トカゲなどの爬虫類もやって来ます。そのような状況で、親鳥には卵を産んでもらわなければならないというので、こうした外敵を寄せつけない忌避剤や、親鳥をさらに惹きつける香料などを使います。このように様々なものを用意して、洞窟の中の環境を再現するだけじゃなくて、アナツバメに留まってもらうためにより良い環境をつくってやらないとイケないんだと村の人は説明します。

こうした工夫は、先ほど述べた「専門業者」も同様のことをしています。その一方で、村落でみられる“養殖”の特徴は、華人みたいにツバメマンションを建てるわけではなくて、もともとあった建物を利用する点です。そうすることで初期投資を安く抑えられることに加えて、こうした建物の多くは、伝統的な高床式だから“養殖”に適しているんだそうです。

それでは、インタビューに基づいて、この人物が“養殖”を始めた背景を整理してみます。第1のポイントは主要交通手段の変化です。自宅に併設した村の食堂が今回、ツバメの巣の“養殖”施設に改変したところですよ。この食堂は川沿いに立地しています。というのも、

道路ができるまでは主な交通手段というのは、河川だったんですけれども、それが2000年代から道路が整備されるようになってきました。そうすると、人の流れは川から道路沿いにシフトしていきました。道路に接続していないため客が来なくなったこの食堂は、2010年に閉めてしまいました。“養殖”施設にすることで、そのまま放ったらかしにしていた建物を有効活用できたわけです。第2のポイントは昔からの知り合いが助言してくれた点にあります。シブという遠くの町から訪れた知人が、「ここはツバメの巣の“養殖”に適している」と教えてくれたそうです。これ、誰でもいいわけじゃないんですね。村の人たちは対面での人間関係をすごく大事にしています。そして、第3のポイントは電気です。これがトリガーとなりました。2023年、この村に初めて電気が通ったんです。“養殖”するには24時間鳴き声を流し続けてないといけないので、安定した電力というのは、現代のツバメの巣の“養殖”には不可欠な要素なんですね。

こうして不可欠な要素が整うと、成功するかどうかの確証なんてなくてもやってみようとする。村の人たちのこの行動力に、私がいつもほれぼれします。「面白そう!」とか、「なんかいけそう!」と思ったら、不安要素がいくらあってもやるんです。

とはいえ、この村では少し前まで（少なくとも私が住み込んでいた2010年ごろ）は、洞窟でツバメの巣を採集していましたので、“養殖”はこの村には馴染まないんじゃないかなとか、なんか不自然な感じて私は思っていました。けれども、よくよく彼らの行動を見ると、彼らが昔からやっているような可食植物の半栽培（semi-domestication）⁶、あるいは焼畑での稲作の感覚と似ているように見えてきました。どういうことかといいますと、“養殖”も焼畑も最初はかなりの労働投下（“養殖”の場合は資本投入も）が必要です。でも、あとは自然任せっていうところは一緒なんですね。こういうところが、村の人たちにとっては“養殖”を始めるハードルを下げているというか、ハードルだとすら感じてなかったんだな、ってだんだん見ていて思いました。加えて、コロナ禍を経験したことも影響しています。コロナ禍が明けて、私が久しぶりに村を訪れた際、「コロナの時みんなどうしてたん?」って私が聞いたら、「ものすごくヒマだった。だから森にずっといた」って言うんですね。そういう何もしない森の時間もあったことが、“養殖”を始めてみようと思ったきっかけとして考えられるのではないかなど。これは、現時点でM村の中で唯一の“養殖”例ですが、他の内陸の村でも少しずつ始まっているようです。

6 宮内泰介 2009 『半栽培の環境社会学——これからの人と自然』昭和堂。



写真3 “養殖” ツバメの巣

● ツバメの巣を“養殖”する人びと（インドネシア 西カリマンタン州）

それでは、世界で最もツバメの巣を“養殖”し、この分野に関してはマレーシア人からの絶大な信頼を得ている絶対王者・インドネシアはどんな状況なのでしょうか？同じボルネオ島のインドネシア側、西カリマンタン州に行ってみました。

マレーシア側で用いられている“養殖”技術や知識はすべて、インドネシアで誕生・拡散し、マニュアル化されたものです。マレーシア側はそれを「輸入」し、マレーシアでも土着化というか専門家がようやく出てきたのが今です。ツバメマンションが立ち並ぶのは、マレーシアでは一部の地域に限られた光景なのですが、インドネシアへ行くとどこ行ってもあるんです、びっくりするぐらい。

とりあえず西カリマンタン州をぐるぐる回ってみましたので、その様子を写真でご紹介します。クブ・ラヤのサウ・ジャヤ村で見かけたツバメマンションです。話を聞いてみると、2023年に完成したばかりだそうです、もういくつか巣を収穫したと言って嬉しそうに見せてくれました（写真3）。この家では“養殖”以外に複数の作物を栽培していました。インドネシアやマレーシアの農村ではよくあるように、この家もその時に価格が上がったものや売



写真4 ツバメマンションの外観

れそうなもの、あるいは得意な作物など、状況に応じて栽培する作物や土地利用の方法を適宜工夫しています。この方は、このツバメマンションを建てるときに、ビンロウジュの木を全部切ったそうです。ビンロウジュとは、ヤシの仲間で、その種が南アジアによく輸出される嗜好品でして、噛みたばこのように使用されます。当時、この価格がものすごく下がっていたんです。だからこの方は、そんな二束三文でしか売れないものはばっさりと切り捨ててツバメマンションを建てた。潔いですね。

こちらは、ムンパワ県スングイ・プルン村でお会いした農家さんです。農業に関して非常に勉強熱心な方でした。この方は、ツバメマンションもご自身で勉強して少しずつ資材を買い集め、利用できる廃材は利用して建てたそうです。とても親切な方で中を見せてくれました。これが本当に教科書どおりのやり方でした（写真4）。ちゃんと洞窟の中を再現する香りがあり、室温度の管理をし、USBメモリの音源をPCにつないで音を出しています。

●ツバメの巣を食べる人びと

ここまで、ツバメの巣の生産側を見てきました。ここからは、ツバメの巣をどうい

何を期待して食べていて、どうやって商品価値が決まっていくのかについて見ていきたいと思えます。ツバメの巣を食べることによる効能はいろいろとされていますが、商品価値が決まるのは何よりも見た目です。見た目が悪いと商品の価値は一気に下がります。特に価値が高いのが白い巣です。ちょっと黒っぽいものよりも明らかに高いです。そのほか、黒ずんだもの、黄色いもの、赤みがかったものなど細かく分類されます。さらに形の美しさも重要です。ツバメの巣の理想のプロポーシオンは、お椀型で決まります。お椀のカーブが深いこと、そして密度がぎゅっと詰まったもの、スカスカじゃダメだと、かなり細かく注文がつかます。こうした条件がすべて揃っているものが最高級品となります。ただし、赤い巣に関しては、白い巣の価格を抜く場合があります。これは blood nests(血の巣)と呼ばれていまして、血が混ざっているというのがサラワク州の華人商人の説明です。血が混ざっているがゆえに、特別な薬効があると期待される巣です⁷。しかしその一方で、食品偽造行為も横行してしまっていて、ツバメの巣を赤く染める偽造や白く漂白する偽造の事例が後を絶ちません。そのため、いかにそれを見抜くかという研究もたくさんあります。もういちごっこですね。

もう1つ、価値を決める要素として気になるのが、天然(洞窟)と“養殖”どっちの価値が高いのか、という点です。なんとなく日本人の感覚だったら、天然ウナギの方が高いように、ツバメの巣も天然ものの方が高そうですね。でも、ツバメの巣は決してそういうわけではないようです。サラワク州の州都クチンで乾物商を営む華人に話を聞くと、天然か“養殖”かで価値が決まるんじゃないといえます。そうではなく、天然ものは太くて喉越しがしっかりある、他方の“養殖”ものは細くて飲み込みやすい。なので、どういう人に贈りたいのかとか、喉ごしがあるほうが好みなのかとか、そうしたことによって選ばれるのであって、天然だから高い・良いとか、そういうことではないという説明でした。

今までお話してきた中で、ツバメの巣の食べ方が大きく変わってきているので、少しここで整理してみたいと思います。最初に、明王朝から始まったと考えられているツバメの巣の食べ方について。この時のツバメの巣は皇帝だけが食せる不老長寿の秘薬、あるいは権力の象徴でした。つまり、威信材です。そこから次第に、妊婦への贈答品とか、春節の贈答品という贈り物(ギフト)のとしての消費の仕方が加わり、近年では健康商品、美容関連商品として、化粧品やサプリメント等に使用されることが多くなってきました。美容関連商品はものすごくバリエーションが増えています。こう見ると、今は明らかに女性を対象にした商品なのですが、もともとは男性性の強い資源だったのが、いつの間にか、女性性を帯びた資源

7 佐久間香子 2022 「何がツバメの巣の価値を決めるのか」『The Daily』(NNAマレーシア版)07210:13。

というふうに読み替えられてきていることがわかります。

健康食品としてツバメの巣の需要の高まってきたことについては背景の説明が必要です。ここ数年、サラワク（マレーシア）ではツバメの巣の瓶詰めを店頭に並べる店がすごく増えました。この食べ方自体は古くからあるそうなのですが、なぜこれがこの数年でサラワクで急増しているのでしょうか。そのきっかけは2015年、インドネシア史上最大規模で最悪と言われる火災とそれに伴う煙害です。かつてない規模の火災の原因はアブラシ農園の造成の際に火入れをしたことと、その年のエルニーニョ現象が合わさったことです。煙害の範囲はさらに広く、シンガポールやマレーシアなど近隣の国にまで被害が及びました。この時にマレーシア側でも大勢が呼吸器官系を患いました。そんな中、喉を守るためのツバメの巣の食べ方っていうのがもすごく流行ったんです。それが、ツバメの巣をボイルして、砂糖を合わせて瓶に詰めて冷蔵庫で冷やし、それをティースプーン1杯飲むと喉に効く、というものです。さらに煙害の余韻が消える前に世界はコロナ禍に突入しました。この時にも肺や呼吸器官を守るためのツバメの巣を頼る人が多く、自宅でボイルするよりも手軽な瓶詰が急速に商品化されて広まりました。

●ツバメの巣を“養殖”しているのか？それとも・・・

じゃあ、このややこしいツバメの巣を“養殖”をめぐる状況を一体どう考えればいいのか？いくつか考える視点を整理します。

まずは、一旦サラワクのM村に立ち返って考えてみたいと思います。M村はかなり内陸部に位置しています。ここの村人の場合、“養殖”を始めたトリガーとなったのは、安定した電力が村に初めて来たからでした。そして、その電力というインフラ整備の前段階には送電・配電の整備があって、さらにそのためには陸路（道路）の開通が必要です。では、M村のような内陸の村までの陸路が整備されたきっかけはというと、サラワクの森林開発、すなわち商業伐採とアブラヤシ農園開発でして、ツバメの巣もこうした文脈と無縁ではられません。

次に、“養殖”という言葉です。本日の発表ではタイトルからカッコ付きの“養殖”を用いています。発表中は口頭ではずっと“養殖”と言ってきましたが、本当にこれを“養殖”と呼んでいいものなのかどうか、というか、より正確には、それは適切ではないけれども適切な言葉が見つからないので、カッコ付きのまま使っています。これを作物と考えてみたとき、半栽培的だという話をしました。実際に、西カリマンタンの農家でピンロウジュの木を全部切ってツバメマンション建てていたように、栽培作物を変える感覚でツバメの巣の“養殖”を始めた事例もありました。インドネシアではこのように、小農による多種栽培の一種としてツバ

メの巣の“養殖”が位置づけられていることが特徴です。

でもここで注意が必要なのは、相手は動物（鳥）だということです。栽培ではないとしたら、畜産なのか？これもなんだか違う。というのも、“養殖”したいのはツバメそのものではなく、その巣なんです。商品はツバメの巣であって親鳥でも卵でもないんですね。その親鳥はというと、野生のままです。外に出て虫取りに行ったり好きなように出入りしていますし、そうできるように作ってあります。これを畜産と呼んでいいのだろうかといえば、やはり違う。つまり、“養殖”とも“栽培”とも“畜産”とも言えないような、なんと捉えていいかわからないドメスティケーションのあり方がツバメの巣の“養殖”なんです。

頭がこんがらがってしまいますが、何がどういう事象とどう絡まりあっているのかをできるだけ整理した上で、冒頭に述べたように、ツバメの巣の“養殖”というレンズを通してどういう世界が見えてくるのか、今の私ができる範囲で現段階でまとめてみました。

まずツバメの巣を消費しているのは、ほとんどが中国、あるいは華僑華人と呼ばれる人たちです。近年、楽天やAmazonでも販売されているので日本でも買う人がいるんでしょうけれども、主要なマーケットは中華世界です。そこでは子孫繁栄、美容、健康への期待が大きいことを見てきました。特に健康に関しては、煙害やコロナ禍の経験によるグローバルヘルスへの関心が無視できません。このような国境を越えた煙やウイルスから身を守るという意味で、ツバメの巣の消費がさらに拡大しました。

このような消費の傾向があることを確認した上で、生産側、今日ご紹介したサラワク（マレーシア）と西カリマンタン（インドネシア）の村の状況を振り返ります。インドネシアは世界に先駆けて“養殖”が行われた国です。西カリマンタンの農村の場合、小農による多種栽培の1つとしてすっかり馴染んでいるという様子が見えきました。他方、西カリマンタンを含むインドネシア側で広く普及した“養殖”の知識を輸入したマレーシア側（サラワク）では、狩猟や採集、漁労、焼畑、その他の生業を複合的に組み合わせてきた人々にとって粗放的な“養殖”は大して違和感なく受け入れられつつあります。つまり、初期の労働投下はかなりしんどいんですが、あとは自然に任せてほぼ放置しておくので、他の生業経済活動と組み合わせやすい。だから、自分たちの生業活動のひとつとして取り入れる選択肢として“養殖”はアリなんです。もちろん、親鳥は野生のままなので営巣してくれるかどうかなんて確証はありませんが、不確実なんて大前提です。

ただし、生産地の状況をよりグローバルな文脈に位置づけてみると、特にボルネオ島の場合、熱帯雨林の消失、あの木材伐採やアブラブラヤシ農園開発と切り離して考えることはできません。こうした大規模森林開発がボルネオ島の生物多様性の消失につながり、気候

変動の一因になってきたことは、枚挙にいとまがないほど多くの研究や NGO が指摘してきたことです。ツバメの巣の“養殖”を考える上では、こうした事態が新たなグローバルヘルスの危機や食の安全を脅かしていることに目を向ける必要があります。これらが脅かされると、消費する側としての危機がおおられて、それをなんとかしたいという欲求が刺激されて買い求めるという、このサイクルの中に絡め取られていってしまいます。

こうしてみると、ツバメの巣をなんで“養殖”するのかを考えると、“養殖”の方が安全で効率的というだけでは説明できなくて、さまざまな絡まり合いの中から検討する意義が見えてきます。そして、そこから何が言えるかは、今後の私の課題です。何ができるか、どういふふうに提示することができるか、どういう視点で捉えるべきなのか、ということは今後考えていきたいと思います。以上で私の発表の終わりとしたいと思います。ありがとうございました。